

# ホーソンの作品に現われるピューリタニズムの解釈をめぐって

——『緋文字』と初期の短篇から——

上 田 み どり

## 序

ニューイングランドの地にやって来たピューリタン達の個人の信仰のあり方は、世代の交替につれて、また社会との関わり方が変わるにつれて、多少の差異は見られるものの、どの時代においても、ピューリタニズムの倫理観がニュー・イングランド社会の人々の行動様式に深く根ざしていたことは間違いない。ホーソン (Nathaniel Hawthorne [1804—1864]) がアメリカ建国初期という過去の社会を題材にする時、ピューリタニズムという思考形態を避けられないテーマとして追い続けるのも、こうした時代背景があるからであろう。実際、ホーソンは、初期の多くの短篇で、ピューリタニズムを題材にして人間の直面する悪の問題を提示している。そしてその後、『緋文字』<sup>(1)</sup> (*The Scarlet Letter* [1850]) で、その問題提示に正面から取り組んだピューリタンと、ピューリタニズムを無視して時代精神を先んじた者とを対比させ、両者の生き方の問題点を問うている。そこで拙論においては、『緋文字』に先立つ短篇に現われるピューリタニズムを検討しながら、『緋文字』の重要な二人の登場人物、すなわちヘスター・プリンとアーサー・ディムズデールの描き方に窺われるピューリタニズムに注

(1) *The Scarlet Letter* のテキストは、The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne I (Ohio State University Press, 1964) を使用した。『緋文字』からの引用は、すべてこの版からであり、引用に続けて括弧内に S. L. と頁数を示す。

目して、『緋文字』を書き上げた時点でのホーソーンがピューリタニズムをどのように捉えていたかを、考察してみたいと思う。

ピューリタニズムの色が濃いホーソーン作品でも、1837年に書かれた「エンディコットと赤十字」(“Endicott and the Red Cross” [1837]) は、ホーソーンのパューリタニズムの雰囲気をよく表わしている。というのも、英国からニュー・イングランドにやってきたピューリタン達が、建国の気概に燃えて意気盛んなエンディコット隊長を軸に、「市民権」(our civil rights) と「良心に従って神を礼拝する自由」(liberty to worship God according to our conscience) を獲得するため戦うという、第一世代のピューリタン達の力強い生き方を題材にし、また、正義感と使命感とに溢れるエンディコットを主人公としながらも、作品全体をおおう雰囲気は、後の閉鎖的ピューリタン社会を連想させる暗い闇に包まれているからである。ここではエンディコット達が戦ったはずの、人間を抑圧する、国家や政治や宗教の支配者が、現存する社会を支配しているという批判や、現存のピューリタニズムに対する深い失望が実感されるのである。

このような批判や失望は、「優しき少年」(“The Gentle Boy” [1832]) に窺える、人間性を失ったピューリタニズムに対する批判に通じるものである。この作品は、信仰を守ろうとするゆえにかえって排他的になっているピューリタン社会で、異教徒の子どもを引き取って正しい信仰に導いてゆくピューリタン夫婦を描いている。ここでホーソーンは、権威に抵抗する数少ない勇者を支持しており、弱い少数の異教徒を迫害する側のピューリタン社会は、本来のピューリタニズムとは逆転した信仰継承を行っているという、作者の皮肉が読み取れる。すなわち、世代が交替する内に、明らかな信仰体験を持って移住した第一世代のピューリタンに比べ、数の上では力を増しながらも、本来の信仰心にあふれたピューリタン達の理想とする姿ではなくなっていることが強調され、狭量なピューリタニズムが批判されているのである。ここにはまた、日々の営みの中に現われる個人と社

会との関係が、伝統的ピューリタニズムの本然的な姿とはかけ離れてしまったとするホーゾーンの考えも窺える。

ピューリタニズムの批判を奥に潜めていた上記二作とは少し異なり、それよりもっと早くに書かれた短篇作品「ぼくの親戚モリノー少佐」(“My Kinsman, Major Molineaux” [1828–29])において、ホーゾーンは、国家や宗教に対する批判を通してではなく、もっと直接的な方法で神に対する懐疑や不信を明らかにする。この作品でロビン青年は、立身出世を夢みて叔父の援助を求めるために旅にでる。旅は、牧師である父を中心にした家族の祈りと共に始まる。これはピューリタン家庭の典型的日常性を帯びた始まりである。しかしながら、「旅に出る」という行為はすでに日常性を離れた危険性を暗示し、物語りは終始闇の中で進行していく。教会の入口で余儀無く「待つ」ことを強いられたロビン青年の不安な精神状態は、ピューリタン達がこの世で天国を獲得できるか否かを決定する巡礼を暗示している。

この物語りの最後の部分からの次の引用は、青年が旅を通して何を認識したか示している。

‘Well, Robin, are you dreaming?’ inquired the gentleman, Laying his hand on the youth’s shoulder.

Robin started and withdrew his arm from the stone post, to which he had instinctively clung, while living stream rolled by him. His cheek was somewhat pale, and his eye not quite so lively as in the earlier part of the evening. . . .

‘. . . as you are a shrewd youth, you may rise in the world, without the help of your kinsman, Major Molineux.’<sup>(2)</sup>

(2) Nathaniel Hawthorne, *The Snow Image, Uncollected Tales* The Centenary Edition XI (Ohio State UP, 1974) pp. 230–231.

ここで描かれている ‘The stone post’ は、ロビン青年が唯一しがみつくとことのできる物である。これはまた、彼の信仰の象徴と見なし得る。しかし、青年がこのよりどころを、人間の持つ悪魔性のためいつ失うとも限らないように、彼の信仰もまた、失われる危険性を多くはらんだ危ういものにすぎない。

ところでデイビッド・スタナードは、信仰をゆるがせにしない日常性がありながらも、人間が完全にはなれない不確かな存在であることを次の引用のように述べている。

... there was no way in this world of knowing with certainty whether one was saved or not. In other words, the best sign of assurance was to be unsure. As a result, the devout Puritan constantly examined himself and assailed all evidence of impurity, filling journals and diaries with interminable exhortations on the depravity of all men, but most importantly himself. For, as Edwards put it, “there is no man on earth that is so just, as to have attained to such a degree of righteousness, as not to commit any sin.”<sup>(3)</sup>

「ぼくの親戚モリノー少佐」のロビン青年が、ピューリタンの指導者である牧師の父を持ち、あれ程信仰の厚い日常を過ごしながらも、最後には、旅にでる前の生気に溢れた信仰心厚い青年ではなくなり、曖昧模糊とした精神状態になっていくのは、まさに、スタナードがここで述べているような人間性の不確かさゆえであると思われるのである。

このような早い時期の作品に窺われる、ホーソーンのピューリタニズムに対する不信は、1835年に、同じ様に青年の旅を題材にして書かれた「青年グッドマン・ブラウン」 (“Young Goodman Brown” [1835]) でも明確

(3) David Stannard, *The Puritan Way of Death* (Oxford: Oxford UP, 1977) p. 75.

に受け継がれている。次の引用では、青年グッドマン・ブラウンの心が善から悪に変わる場面がよく示されている。

The cry of grief, rage, and terror, was yet piercing the night, when the unhappy husband held his breath for a response. There was a scream, drowned immediately in a louder murmur of voices, fading into far-off laughter, as the dark cloud swept away, leaving the clear and silent sky above Goodman Brown. But something fluttered lightly down through the air and caught on the branch of a tree. The young man seized it, and beheld a pink ribbon. 'My faith is gone!'<sup>(4)</sup>

この物語を通して、ピンクのリボンを髪に飾る妻フェイスは、その名がアイロニカルに響くほど、ピューリタン社会における異質性と罪を暗示している。従って、引用の場面で、このリボンが青年にらく印をおすかのよう<sup>(4)</sup>に天から落ちてきたことは、グッドマン・ブラウンの心が妻フェイスと共に変容したことを明示している。そしてこの変容は精神に決定的に破壊的であり、絶望と懐疑にしか生きられない主人公の余生を示唆している。グッドマンが絶望の懐疑の運命から逃げられないことは、先の引用の後の出来事を示す、次の引用部分で確実なものとなっている。

... and at morning or eventide, when the family knelt down at prayer, he scowled and muttered to himself, and gazed sternly at his wife, and turned away. And he had lived long, and was borne to his grave, a hoary corpse, followed by Faith, an aged woman, and children and grandchildren, a goodly procession, besides

(4) Nathaniel Hawthorne, *Mosses from an Old Manse*, The Centenary Edition X (Ohio State UP, 1974) p. 83.

neighbors, not a few, they carved no hopeful verse upon his tomb—stone: for his dying hour was gloom.<sup>(5)</sup>

従って、この作品においては、明確な信仰体験を持って入植した初期ピューリタン達の精神の内面にさえ、神の全能と善意を疑う懐疑的傾向があったことが示され、それ故ホーソーン自身が、後の確直したピューリタンに限らず、ピューリタン全体に、ひいては人間すべてに対して懐疑的であったのではないかと思われるのである。

これまで見てきたように、ホーソーンはピューリタニズムに対する不信、ひいては人間に対する不信が色濃く窺われるが、反面、ホーソーンの1836年の短篇『ディビッド・スワン』(“David Swan”)におけるように、ピューリタニズムの肯定的見方が読みとられるものもある。この主人公の青年もやはり旅にでる。そして、この青年がボストンへ向かう途中の泉のそばで午睡をする間、富と愛と死という大事件に知らないうちに取り巻かれていたという、夢のような体験を語ることにより、ホーソーンは神の摂理という考えを問うている。この作品の最後の場面を示す次の引用を見てみたい。

Up mounted David, and bowled away merrily towards Boston, Without so much as a parting glance at that fountain of dreamlike vicissitude. He knew not that a phantom of wealth had thrown a golden hue upon its waters---nor that one of Love had sighed softly to their murmur---nor that one of Death had threatened to crimson them with his blood---all in the brief hour since he lay down to sleep. Sleeping or waking, we hear not the airy footsteps of the strange things that almost happen. Does it not argue a superintending Providence, that, while viewless and unexpected

(5) Nathaniel Hawthorne, *Mosses from an Old Manse* The Centenary Edition X (Ohio State UP, 1974) pp. 89-90.

events thrust themselves continually athwart our path, there should still be regularity enough, in mortal life, to render foresight even partially available?<sup>(6)</sup>

この青年が一度は死霊に見舞われる運命にありながら、神の意図により救われたように、ここでは、神の摂理の名のもとに、旧約の予型論の解釈の可能性が肯定されている。つまり、ピューリタン達が多く困難に会いながらも、新しい世界に着くことを可能にした、彼等の「選ばれた民」としての誇りに根ざす精神主義が、新しいアメリカの物質主義に対する救いとなる可能性を、ホーソーンは肯定しているように思われるのである。

結局ホーソーンは、初期の短篇において、ピューリタニズムが建国初期に個の人間性を歪めるほど排他性を極め、精神の暗闇に陥ってしまったことを提示すると共に、初期ピューリタニズムの誇り高い、肯定的な一面を充分認識していたことが理解される。これら短篇に現われたピューリタニズムのすべての特長は、『緋文字』という傑作に結集されている。『緋文字』では、時代精神に先じた女主人公ヘスター・プリンの個人主義的な考え方と対照的に、ホーソーンが初期短篇で批判してやまなかったような、硬直したピューリタニズムの陰鬱な世界が描かれる一方、ディムズデールを通し、アメリカが失うことの出来ない、いや失うべきではないとホーソーンが考えていると思われる、ピューリタニズムの別の面も描き出されているからである。

この点が具体的にどのように描かれているのかを、『緋文字』を支える結婚観という点から眺めてみたいと思う。

十七世紀にアメリカに渡ったピューリタンは、ルネサンス以前のヨーロッパの結婚観をアメリカに持ち込んでいた。個人は社会の一単位として社会的秩序をもたらすために、結婚という契約をした。ピューリタンにお

(6) Nathaniel Hawthorne, *Twice-Told Tales* The Centenary Edition IX (Ohio State UP, 1974) pp. 189–190.

いてはこれがさらに厳しい契約になる。というのも、そもそも旧約聖書の「出エジプト記」(Exodus) [20:14], 「レビ記」(Leviticus) [20:10], 「申命記」(Deuteronomy) [22:22], 「サムエル記下」(II Samuel) [12:9] には、それぞれ姦通の戒めが述べられており、その内「レビ記」と「申命記」では、その罪は死をもって処せられることが記されているからである。ピューリタンは聖書を、神と人間との間で交された神聖な契約と見なしたので、その契約の違反者には至福の約束を認めることはできなかった。

一方ヨーロッパにおいては、ルネッサンス以降、『ロメオとジュリエット』(*Romeo and Juliet* [1594]) や『リア王』(*King Lear* [1606]) 等の作品に見られるように、<sup>(7)</sup> 社会秩序にとらわれない愛の存在が謳歌されるようになり、制度としての結婚はむしろとましいものとされ、形骸化し、姦通でさえ偶発的な愛の形式であって、最大の罪ではないとされる傾向が生じていた。そして、このヨーロッパの結婚観は、ヨーロッパのロマン主義と共に、ホーソーンの時代にアメリカに運び込まれた。ヘスター・プリンを描く作家の態度には、当時の社会の基準で見れば実にヨーロッパ的な個人主義的要素が現われている。例えば、姦淫の罪で刑場に立つヘスターは誇らしげな美人であり、彼女の胸の緋文字は鮮やかな刺繍で飾り立てられ、その美しさを作家は、“of a splendor in accordance with the taste of the age, but greatly beyond what was allowed by the sumptuary regulations of the colony” (p. 43) と述べて、このピューリタン社会とは相容れない部分を秘めたヘスターの性格を示している。

このようにヘスターは、当時のアメリカに輸入された新しい結婚観の先端を代表する者として描かれているが、この性格付けは、ディムズデルが体现する伝統的なピューリタニズムの厳格で抑圧的側面を強調する。例えば次の引用は、ディムズデルの性格の否定的な一面を良く示している

(7) 『ロメオとジュリエット』では、父権制や主人公二人の精神的未熟の問題はあるにせよ、愛を優先する行動を二人はとっている。また、『リア王』では、抑圧されていた中世の結婚に対する固定観念を庶子エドモンドを通して風刺しながらも、自然的な性の肯定を表わそうとしていて興味深い。(1幕2場11-18行)。



ように思われる。

In no state of society would he have been what is called a man of liberal views; it would always be essential to his peace to feel the pressure of a faith about him, supporting, while it confined him within its iron framework. (S. L. p. 123)

ここで言われる「信仰という鉄の枠」(iron framework) は、ヘスターの現代的思想とは一致することのない思想の枠組みである。

ところが、作家がディムズデルの中に示しているピューリタニズムは、我々が暗い印象を受ける、カルビニズムから受け継いだ、過去の遺産的ピューリタニズムばかりではない。そこには、「選ばれた民」(chosen people) のもう一つの面を見ることができる。例えば最終場面のディムズデルには、次の引用文にみられるように、二つの対象的なピューリタニズムの性格が窺われる。

“... God knows; and He is merciful! He hath proved his mercy, most of all, in my afflictions. By giving me this burning torture to bear upon my breast! By sending yonder dark and terrible old man, to keep the torture always at red heat! By bringing me hither, to die this death of triumphant ignominy before the people! Had either of these agonies been wanting, I had been lost for ever! Praised be his name! His will be done! Farewell!” (S. L. pp. 256-257)

ここでは、神を慈悲深い神としてとらえており、善悪を裁く厳しい神の姿は影を薄くしている。そして、ここで並列されている二つの言葉、“ignominy”と“triumphant”を吟味してみると、そこにはホーソーンの二面

的な態度が窺われる。まず、“ignominy”について言えば、これはこの世で裁かれる恥辱を意味しているので、姦淫の罪を犯したディムズデールには、地獄の火は回避できないもののように映る。これは、コンラッド・チェリー (Conrad Cherry) が *The Theology of Jonathan Edwards: A Reappraisal* の中で、ピューリタン達の信仰を「理性ある同意」(rational assent) 以上のものだと述べている点と一致する。<sup>(8)</sup>つまり彼は、ジョナサン・エドワーズ的なピューリタニズム、すなわち、ピューリタン達の究極の目的は死後の至福に預かることであり、彼らは罪を犯さない限り、その至福の恩恵に預かることができる選ばれた民であると考え、これを前提として、その恩恵に預かることができる者はどれだけいるかを自省する性格を、ピューリタン達に薦めている。そして、ピューリタン等は罪を犯したがゆえに日々受難の道を歩む一方、彼らの祖先と同じ様に天国への巡礼の旅へと努力してゆくのだと、主張する。

一方、“triumphant”は、ディムズデールが社会に挑戦的な態度をとりうる可能性があることを示唆し、もっとのびやかで肯定的なピューリタニズムを表わしているように思われる。それは、ペリー・ミラー (Perry Miller [1905–63])<sup>(9)</sup>をはじめとするハーバードの歴史家達が、個々の魂の救済を求める姿勢が、質実剛健、賢忍不拔の精神と結び付き、アメリカ植民地社会に浸透し、活力となり、建国の途を辿る社会に対して秩序を形成する基盤を作ったのだと主張しているピューリタニズムに通じるものである。<sup>(10)</sup>実際、このペリー・ミラーの考えを肯定するかのように、ディムズデールの最後の言葉は神への賛美と神の摂理の成就で成り立っている。ここに

(8) Conrad Cherry, *The Theology of Jonathan Edwards: A Reappraisal* Anchor Books Edition (Doubleday a Company, 1966) pp. 12–13.

(9) 1931年 Harvard 大学に職を奉じ、第十七・十八世紀 Puritan 研究の権威で、*Orthodoxy in Massachusetts* (1933), T. H. Johnson との共編 *The Puritans*, (1938), Jonathan Edwards (1949) 等ピューリタニズムに関する著書が多数ある。

(10) ペリー・ミラーが重要視しているピューリタンの詩人 Anne Bradstreet の詩 “To My Dear And Loving Husband”, “Verses upon the Burning of Our House” の中に、このピューリタンの文学的資質が共通して見られる。

はかたくななピューリタニズムではなく、自らを「選ばれた民」と素朴にみなし、日々の善行に励んだピューリタン達の純粋な善意が窺えるのである。

この様な見方に少し比重を置いた解釈をすれば、ディムズデールの最後の告白は、「神との和解」(Absolution) という結論につなげることができるだろう。彼は、自然の衝動といった人間性の部分を極度に禁じたピューリタニズムを代表する人物だったが、最後の告白の叫びによって、自己抑制から心を解き放つことを可能にしながら、ピューリタンの信仰を最後まで守り続けたことを示しているからである。

アメリカの繁栄をもたらす当時の民衆の楽観的思想に、ホーソーンもまた時代の子として無関心ではならなかったが、ピューリタニズムの伝統的思想に根ざす暗い心の闇もまた彼の多くの短篇に見られるのである。そして、多くの主人公は信仰から離れ、絶望を暗示する暗い結末に至る。しかしながらホーソーンは、1842年6月1日付けの「アメリカン・ノートブックス」に、次の様に人の心を表わしている。

The human Heart to be allegorized as a cavern; at the entrance there is sunshine, and flowers growing about it. You step within, but a short distance, and begin to find yourself surrounded with a terrible gloom, and monsters of divers Kinds; it seems like Hell itself. You are bewildered, and wander long without hope. At last a light strikes upon you. You press towards it yon, and find yourself in a region that seems, in some sort, to reproduce the flowers and sunny beauty of the entrance, but all perfect. These are the depths of the heart, or of human nature, bright and still is this eternal beauty.<sup>(11)</sup>

(11) Nathaniel Hawthorne, *The American Notebooks* The Centenary Edition VIII (Ohio State UP, 1972) p. 237.

つまりホーソーンは、根本的には人間の救済の可能性を信じ続けていたのであり、しかも真の幸福は墮落や葛藤を通して初めて獲得され则认为していたのである。それ故、ホーソーンの作品の暗い結末は、読者に至福の世界を示唆する彼の反語的手段であり、その心の闇をつきぬこうとする努力の中に、ホーソーンは人間の尊厳を見出していたのだと考えられる。そして闇を見据えてゆくところに人間の可能性を信じていたからこそ、彼はピューリタニズムという、人間性を重んじながら他方でそれを抑圧する体系化された宗教に固執し、なおその中から精彩ある物語を構築できたのであろう。